

内裏北外郭の調査

—第386次・387次・397次

1 第386次調査

はじめに

市道の改修にともなう調査として実施した。調査地は奈良市佐紀町、平城宮内裏北外郭北辺にあたる(図125)。東西にはしる市道の南縁にそって0.8×61mの調査区を設定した。調査面積は約48㎡、調査期間は平成17年1月19日から2月9日である。

基本層序

市道路面と市道の南辺にひろがる畑の地表面とは0.5mほどの比高があり、調査前の地形は傾斜面となっていた。表土の下には市道造成時の整地層あるいは耕作土があり、場所によっては暗茶色の包含層がみられる。これらを取り除くと粘土あるいは砂質土の地山に達する。

検出遺構

遺構は基本的に地山上面で検出し、土壙2基、掘立柱穴12(掘形6、抜取穴のみ6)基を確認した。土壙SK18855は深さ0.2mほどで遺物はなかった。土壙SK18856は最深で0.9mあり、底部近くから平瓦片が出土した。

掘立柱穴は東西にならぶ(図126・127)。柱穴の掘形は一辺1m前後、深さも1mほどある。6基中4基には柱抜取穴も認められた。柱間寸法は2.8~3.2mあり、抜取穴だけを検出した6基も約3m間隔であるから、これら

Y-18,630

X-144,741



は1連の柱列であり、今回の調査区をこえて東に続いていると考える。柱穴掘形の上面には、地山由来の粘質土と砂質土を混合した土が互層に積まれており、最大で厚さ10cmほど残存していた。ただし、柱抜取穴とこの層との重複関係を確認することはできなかった。

出土遺物

軒平瓦6664K 1点と型式不明の軒平瓦3点、道具瓦1点、丸瓦16.7kg、平瓦28.7kg、土器片が出土している。

まとめ

今回は柱穴の南端のみを検出したが、柱穴掘形が1辺1mの正方形と仮定し算出した柱列の芯の座標を参考にとすると、柱穴は今回検出した部分より西には続かないことになる。また、平城第139次調査において検出した内裏北外郭内区北面築地塀の芯は、柱列芯の南約1.5mのところであり、一致しない。この柱列の性格は、今後周囲で行われる調査成果をまっけて判断したい。(今井晃樹)

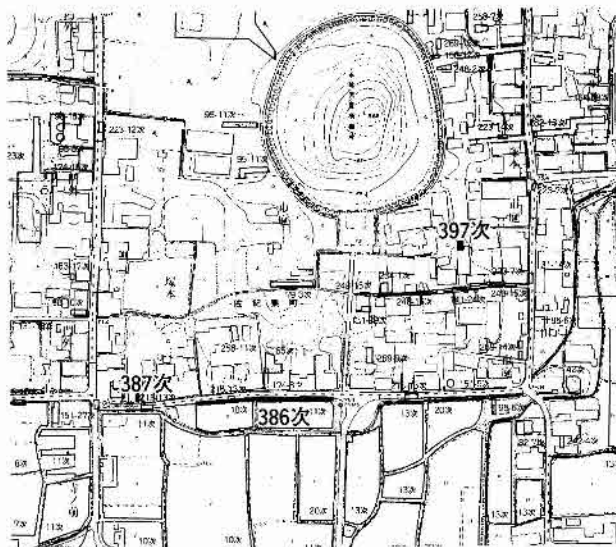


図125 第386次・387次・397次調査位置図 1:4000



図126 第386次調査 柱穴 東から

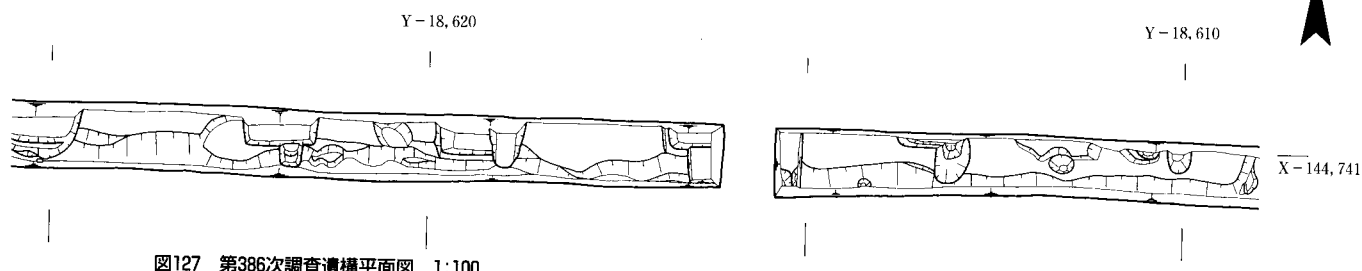


図127 第386次調査遺構平面図 1:100

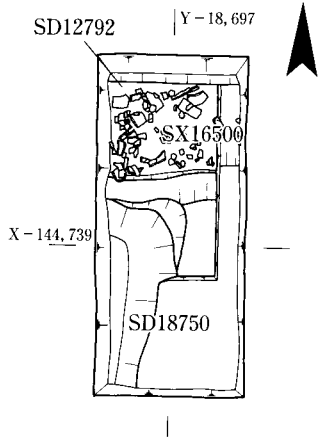
2 第387次調査

個人住宅の新築にともなう調査で、調査期間は平成17年3月1日～3日の3日間、調査面積は東西2m、南北4.5mの9㎡である。

調査地は平城宮内裏北外郭の北方に位置し、また市庭古墳前方部の西周濠内にもあたる。現代の駐車場の砂利敷とその下の旧耕土を除去後、平坦な床土面(明橙褐土)を確認した。床土上面の標高は74.1m前後、現地表面から約40cm下である。床土面の直下に整地土層(明黄褐土)があり、その上面で遺構を検出した。

明黄褐土上面では、調査区北半で東西にのびる瓦の廃棄溝(瓦溜)とそれを切り込む東西溝の南肩、調査区の南半で北にのびて西に曲がるL字形の溝SD18750などの遺構を検出した。瓦溜の瓦片はすべて奈良時代のもので、明黄褐土面を奈良時代の整地土面と判断できる。また調査区北半の東西溝と瓦溜は、西隣する調査(平城248-1次)で検出した東西溝SD12972と瓦溜SX16500の延長上に位置し、これと同一のものと判断できる。調査区南半は内裏北外郭の北面区画塀の想定位置にあたるため、これに相当する柱穴や築地の存在が期待されたが、今回の調査区内ではそれらを確認できなかった。

南端では整地土の状況と市庭古墳周濠の埋土を確認するため断ち割り調査をおこなった。その結果、約1.2mの厚さで黄褐色土が積層する様子を確認した。今回の調査範囲では整地土内にはまったく遺物を含まない。なお周濠の埋土については暗褐色の埋土上面を確認するに止めた。



(金井 健) 図128 第387次調査遺構平面図 1:100

3 第397次調査

個人住宅の新築にともなう調査で、調査期間は平成17年12月12日～14日の3日間、調査面積は東西3m、南北4.5mの13.5㎡である。

調査地は平城天皇楊梅陵(市庭古墳後円部)の東南方に位置し、市庭古墳の周濠推定地の真中にあたる。また、推定では前方部と後円部が接続する付近であるため、仮に造り出しを持つ古墳であれば、この検出が期待された。

現代の表土および耕土の除去し、現地表面から約40cm下の標高75.3m付近で黄褐土の整地層を確認した。調査区の範囲では上面から切り込む現代の溝がある以外は顕著な遺構は存在しない。

南半で断ち割り調査をおこなった結果、黄褐土が厚さ1.5m以上にわたって存在することが確認できた。黄褐土が内包する遺物は若干の埴輪片のみで、層状に堆積するものの各層に明確な差違は認められず、平城宮建設にともなう周濠の埋立土と考えられる。なお、地表下2m付近で水量豊富な地下水層にあたったため、今回の調査では周濠の堆積は確認できていない。(金井 健)

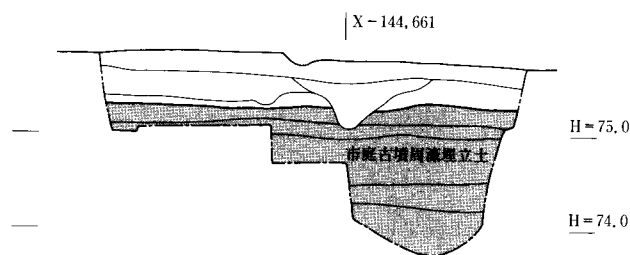


図129 第397次調査 東壁断面図 1:100